



つれづれ時事寸評 1

ある視覚障害者を支えた会社

牧野 洋一

障害者でも普通の人と同じ位仕事をする人がおられる。東京のAさんは若い頃から強度の弱視だった。職場は東京のゼネコンに勤務していた。東京のサラリーマンは電車による通勤の人が多い。Aさんは職場の仕事を他の人と同じ位に片づけながら、毎日40分位の通勤は肉体的にも負担が大きかったように思う。50代半ばには遂に物がぼんやりとかすんで見えるように視力は低下していた。

その頃上京した私は彼と会ったが、その時、「近いうちに緑内障の手術をする」と言っていた。若い頃は両眼のうち片方はある程度見えるようだったが、眼鏡は度の強いレンズであった。彼が眼科で手術して2～3か月経過した頃、私は彼の家を訪ねてみた。彼は眼の手術後、全く視力を失ったために家から一歩も出られなくなり、会社も休職状態になっていた。彼は私を必死で見ようとするが、「上半分が白っぽくなっていて、下半分はうす黒く見える」と言った。全く視力を失った彼に私は何の手助けもできなかった。

彼が1年間位家でぶらぶらしている頃、また東京の彼の家を訪ねてみた。その時視力を失っていたが、顔に生気が戻っていた。「4月から埼玉東洋医療専門学校で鍼灸師になるための勉強をしようと思う。約2年間かかるが鍼灸師の資格をとれば何とか生活してゆくことができる」と元気な声だった。それから

2年位経過して会った時は、いよいよ鍼灸師の国家試験を受けることになったと言った。私を練習台にしてあん摩・マッサージと鍼をおこなった。上手なのかどうかはわからなかったが、とにかく一人前のように振る舞うので、彼が試験に合格するよう祈って別れた。

1年後にまた東京で会った。彼の報告によれば、あん摩・マッサージと鍼灸師の試験に合格したため、休職扱いだった彼は退職となり、すぐさま彼の努力に報いるため社内の医務室であん摩・マッサージと鍼師として勤務することになり、社内の治療を希望する10数人の患者に週5日、あん摩・マッサージと鍼を続けたそうである。

奥さんによると彼は他人の悪口を言ったことがないばかりか、職場から疲れて帰宅しても不平や不満を述べたことはほとんどなかったそうである。このような幸運を勝ち取ったのも彼の人間性によるところが大であったように思う。かつての同僚は懸命に働き続ける彼の姿に感激し、1日の疲労を彼のあん摩・マッサージと鍼により回復させ、彼から生きる元気をもらった人が多かったと聞いた。突然の大不況の嵐の中で、9月の完全失業者は271万人と多い世の中であるが、この話は数年前の東京での実話であり、職場で懸命に働くサラリーマンに、日本のある会社のすばらしさを知っていただきたいとの思いにかられた。

(本研究所嘱託研究員 人文地理学)